

## 〔新刊紹介〕

## 大城道則著『ヒラミッド以前の古代エジプト』

青 木 真 兵

本書の扱うエジプト初期王朝時代とその直前の時期は、ローマ帝国に支配されるまでの実際的な意味での古代エジプト王国、また我々が抱くイメージとしての「古代エジプト」の基礎を形成した非常に重要な期間である。それにも関わらず資料が極端に僅少なために、まるでブラックボックスのような時代であると言える。

序章「エジプト統一王朝への道のり」では、統一以前のエジプト国内の文化的様相が土器やパレットなどの豊富な物質資料により示される。一方で著者は、ナイフハンドルやラベル、ラピスラズリといった外来要素の存在を提示することで、エジプト文化の形成はその内部だけで完結したものではなく、外部との交流によってもたらされたことを確認する。

第一章「神話と物質文化から見た古代エジプト統一王

朝の出現過程」では、「最初の古代エジプト王」つまり上エジプトと下エジプトを統一した人物について考察する。従来この人物はナルメル王とされてきたが、本章ではその通説を文献資料と考古資料の双方から再考し新解釈を加えることで、ナルメルの次の王であるアハの可能性を提示する。また第二章「王名から見る初期王朝時代のエジプト―ジェル王の木製ラベルの新解釈」では、古代エジプトの名前が持つ重要性に注目をする。著者はエジプトが統一される直前の社会状況を、王名の語源や変化を自然科学の援用や図像資料の詳細な分析によって出来る限り復元してみせる。

第一・二章では古代エジプト統一の過程を主にエジプト内部の事象から見てきたが、本章以下では外部世界との関連と共にエジプト文化の形成過程が語られる。第三章「古代エジプト文化の揺籃期について―外来要素の流入とその中断期からの一考察」では、美術と文字の発展過程を当時の文化の中心地メソポタミアとのつながりから考察する。この結果著者は、エジプトに対する外部からの影響に減少期・中断期が存在したことを示唆する。

そしてこの時期こそがエジプト文化の形成に対して重要な役割を担ったのではないかという見解を述べ、次章からの分析へと入っていく。第四章「古代エジプト文化形成期の側面―前期青銅器時代パレスティナにおける古代エジプト文化の影響について」では、エジプトと隣接する地域であるパレスティナに焦点を絞って考察すると、エジプトと外部世界の交流の様子を描写し、第五章「古代エジプト初期王朝時代における仲介都市アラドの役割―銅を媒介としたエジプト交易システムの功罪」ではシナイ半島で採掘される銅をメソポタミアへ仲介することで繁栄を遂げた都市アラドに注目をする。この都市の盛衰を主に考古学的手法を通じて分析することで、アラドにとって重要だったのはメソポタミアではなく、エジプトであったことを明らかとする。この見解は、第三・四章を受け、エジプト文化形成の中断期をさらに立体的にする効果を持つ。また第六章「古代エジプト文化形成期とシナイ半島との交流について」は、第三章から続けて論じられてきたエジプトと外部世界との交流の様子やその中断期を、シナイ半島の銅山開発を軸に物質資

料を通じて明確にしている。

これまで本書は主にエジプトから見た東方世界を外部世界として措定し分析を続けてきたが、第七章「エジプト西方砂漠とオシリス神話―最後のフロンティア」では反対の西方世界に目が向けられており、著者の今後の研究への布石と呼べるかもしれない。こうして終章「古代エジプト初期王朝時代のイメージ」では、本書全体の中で詳細に分析され明らかとされてきた初期王朝時代古代エジプトの姿が描き出される。

著者は専門の枠に捉われない独特の研究スタイルで歴史学や考古学、文化人類学のみならず自然科学の成果をも援用している。そして物質資料を中心に一つ一つ丁寧に事象を裏付けていくことで、ブラックボックスのようなこの時代を再構成するのである。我が国におけるエジプト学への貢献は言うまでもないが、このような研究が平易な文章で読むことができるという点も含めて、本書は人文学研究としてエジプト学の枠をも飛び越える「流動的思考」に迫ることができる最良の書であると言える。